

幼児の発達がいかにして行なわれるかについて、具体例、実験例をひきながら発達と教育についての理論的説明がなされた。たとえば初期の発達に例をとれば、幼児の初期に、ふとんにもぐるのに頭からではなく足からはいるようになり、玄関から下におりるのに足からおりるようになり、滑り台にのぼるのに階段から上って滑りおりるようになるのは一次元の成立である。さらに二次元、三次元の成立があるのであるが、このような発達は、おとなに教えられてできるようになるのではなく、放任されておいてできるようになるものでもない。おとなが、いろいろの可能性を提示して、その中から子どもは選択し、発達に質的転換をとげていく。その場合に、常に高い目標に前進させようとする高次元の方向だけを志した指導をすると、貧困な発達になり、あるところで発達が阻止されてしまうことも起こる。教育的な面からいうならば、発達がどのようにして行なわれるかということに対する洞察が必要であり、教育は、それぞれの子ども豊かな発達、個性的人格の形成に役立つものでなければならぬ。教育制度は、子どもの発達を保証するものでなければならぬのである。内容豊富な発題であったが、わかりやすく要約するならば、以上のように

ある。

討論にあたって、園原教授は、二つの問題を提出された。第一は、就学年齢を、固定的に考えてよいかどうか、学校に入学するといふことは、何か特定のものを要求されるものであるかどうかということ、第二には、幼児は早期に訓練をしないと、この面ではあるレベルまでいくものであるが、人間の発達という大きな観点からみたととき、これでよいのかどうかということである。

討論にあたり、もっとも論議が集中したのは、川口氏のいわゆる学齢成熟を測定するのに、凶形の分節能力だけから見てもよいのかどうか、それが発達を代表するものであるかどうかという点で、いくつかの異論が提出された。そして最後に、田中昌人氏は、川口氏のように、学校教育という枠を前提として、子どもをそれに合わせていくような方向の研究には反対であることを表明され、幼児の発達を保証するような教育とはどういうものであるか、という立場から研究はなされねばならず、教育制度もまた、子どもの発達に役立つものでなければならぬことを強調された。まだ議論の入口で終わったが、幼児の発達を保証するための教育という考え方が、はっきり提出されたことは有益であった。(T)

幼児の教育 第六十六巻 第十号

十月号 © 定価八〇円

昭和四十二年九月二十五日印刷
昭和四十二年十月 一日発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレールベル館にお願いいたします